

旧制中学校における「校友」概念の形成

－1890年代の長野県尋常中学校の校内雑誌『校友』を手がかりとして－

基礎教育学コース・日本学術振興会特別研究員（DC） 堤 ひろゆき

The Formation of an Alumni Identity in an old system- middle School: A case study of an alumni magazine
in Nagano Prefecture in the 1890s

Hiroyuki TSUTSUMI

The purpose of this study is to clarify an alumni identity in the modern Japanese old- system middle school. School experiences played a key role in fermenting the modern Japanese elitism. Students forged alumni identity and connected to the local and national government. An alumni identity played the important role. An alumni association published magazines through which they tried to make stronger the tie between students and alumni And their bonds were represented by alumni identity. However, the identity was focused on the alumni and enrolled students who were set for graduation.

目 次

はじめに

A. 問題設定

B. 対象と史料

1. 雑誌発行の経緯
 2. 長野県尋常中学校における諸団体
 3. 雑誌『校友』における「校友」概念の形成
- おわりに

はじめに

A. 問題設定

本稿は、旧制中学校における校内雑誌を手がかりとして、「校友」という概念がいかにして形成されたのかを歴史的に検討する。校内雑誌の代表的なものとして校友会雑誌が存在しており、本稿では、校友会雑誌の前身である校内雑誌を対象として「校友」という概念の創生と校内雑誌発行の意味について考察したい。

近代エリートは、学校階梯を上昇することで作り出される。彼らは、学校を経験することによって作られる人的ネットワークを持つことになる。中央官僚は近代エリートのひとつであり、清水唯一朗は、近代日本官僚にとっての郷党の形成と展開を、長野県出身官僚を事例として論じている¹⁾。旧制中学校から帝国大学に至る各段階で人的ネットワークが形成されるが、とりわけ旧制中学校のそれは、地方エリートとナショナ

ル・エリートとの両方の可能性が混在しているいわば未分化の状態である。中央と地方をつなぐエリートのネットワークは、旧制中学校で培われたものと考えられる。本稿で論じる「校友」概念とは、当時の長野県尋常中学校関係者であることを示すために作られた概念である。学校によってエリートとなる人びとが学校を媒介とするネットワークを利用していったことから、「校友」概念の形成を明らかにすることは、近代日本のエリートにとっての学校の役割を検討する上でも意義がある。

直接の接触がない構成員も含んで「校友」概念を形成するには、大量生産可能な文字媒体が必要となる。そのため、「校友」概念の検討に当たり、活版印刷によって発行された校内雑誌（校友会雑誌）を史料として用いる。

『校友会雑誌』の研究は、近年特に進展している。とりわけ、斉藤利彦・市山雅美の研究では、旧制中学校の校友会雑誌について悉皆調査を行い、全国的な史料の所蔵状況の一端を明らかにしただけでなく、雑誌の持つ機能についても分類されている²⁾。また、斉藤をはじめとするグループは、全国における校友会雑誌の残存状況についても明らかにした³⁾。中等教育制度の変遷の解明を主題としてなされてきた従来の研究⁴⁾とは異なり、斉藤・市山は「学ぶ者」の視座から「当時の学校の日常的な教育実態および生徒達の行動と意識状況を具体的に考察していく」史料として校友会雑誌

誌の意義を説明している⁵⁾。たとえば、三野和恵の研究が、台湾の台南神学校における『校友会雑誌』から「台湾人」意識を論じたように⁶⁾、校友会雑誌を「教育実態」に近づくための史料として扱うこれらの研究が進展しはじめており、当時の生徒の学校生活が徐々に明らかにされつつあるといえよう。

生徒の手による「実態」を明らかにするための史料として校内雑誌を用いるには、「検閲」が問題とならざるを得ない⁷⁾。市山は、「検閲は学校側役員が行い、生徒は関与できなかった。これは、執筆者の言論の自由だけでなく、編輯に携わる生徒の自主性は認められなかったといえる」⁸⁾として、言論の自由が十分に保障されていなかった点を論じている。生徒による「教育実態」の描写を阻害する要因として検閲が扱われているといえる。こうした検閲の側面は首肯できるものであるが、検閲が行われていたということは、「学校側役員」すなわち教員によって原稿がすべて読まれ、教員がすべて読むということが制度的にひとつの手続きとして成立していたということである。「学校側役員」がすべての原稿に目を通すということは、生徒の書いた文章によって生徒の動向を把握する契機となりうるということでもある。従来の校友会雑誌についての研究では、生徒の動向を把握する契機としての雑誌編集という側面に注目してこなかった。本稿では、雑誌の編集発行という労力のかかる仕事があえて行われた理由として、生徒の動向の把握という側面にも注目したい。

ここで、校内雑誌を発行していた校友会について、若干の説明を加えたい。校友会にかんしては、宮坂哲文が旧制中学校について「高等教育機関における校友会の模倣として、ないしは、学生間の任意の自発的団体に代る学校側の発意になる官製の団体として成立している場合がしばしば見出される」⁹⁾と指摘している。さらに、宮坂の枠組みを用いて富岡勝が、1893年の文部省訓令第四号¹⁰⁾を引きながら、「この訓令をきっかけに、「校紀」に関する改善策の一つとして校友会設立を位置づけた尋常中学校があらわれた可能性がある」¹¹⁾と述べている。

先行研究においては、制度史研究では見えにくい「教育実態」に接近する史料として校内雑誌の意義が示されるものの、校友会雑誌によって具体的に何が作り出されたのかを充実、深化させる必要があるといえよう。また、校内雑誌発行を行っていた校友会が「校紀」に関する改善策の一つである可能性を検討するにしても、具体的にどのように「校紀」を把握し、策を立てるのが検討される必要がある。明治末期から

昭和初期にいたる時期には、「校紀」や風紀は校友のもつ校風として語られることが多くなり、生徒に強制力を持つようになる。本稿では、校内雑誌の検討を通して、「校友」概念が形成されていく最初の段階を明らかにしたい。

B. 対象と史料

本稿で対象とするのは、長野県尋常中学校である。その理由として、以下の2点が挙げられる。まず、清水が指摘しているとおり、近代日本官僚制において郷党が重要な意味を持っており、長野県では「とりわけ、県内においては官途に対する志向が他府県と比べても高く、ナンバースクール、帝国大学を経て中央官僚として相当の人材が供給されていった」¹²⁾点である。ついで、長野県尋常中学校は本校支校を有しており、ひとつの学校が地理的に分散している。このことは、ひとりの学校長が複数の遠隔地の学校を管理、経営する必要があったことを意味する。学校全体の関係者を一括して示す「校友」概念の検討は、地理的に分散しており、各構成員の接点が比較的少ない長野県尋常中学校を対象とすることでより鮮明になると考えられる。

上記の理由に加えて、長野県尋常中学校には、学校長を頂点とする校友会の設置がなされなかったという特徴がある。松本に所在した本校においては長野県松本中学校となってから1915年に初めて校友会という組織が発足した。1915年の発足までは、「校友編輯課」あるいは「校友編輯局」という名称で雑誌を編輯・発行する組織と、運動部の集まりである「体育会」が存在した。長野県尋常中学校では校友会は存在していなかったため、雑誌『校友』を編輯する部局が、「校友」の全構成員を対象とした組織であった。長野県尋常中学校の校内雑誌『校友』は、1895年11月の第一号から、1898年3月の第十一号まで発行されていた(表1)。

長野県尋常中学校では1895年という全国的にみても比較的早い時期に校内で雑誌『校友』を発行しており¹³⁾、この雑誌『校友』上の記述から、「校友」概念が形成される様子を明らかにするとともに、「校友」概念自体の持つ特質を検討したい。なお、本文中で特に指定しないかぎりは、雑誌『校友』の号数のみ記す。また、旧漢字は適宜新漢字へと改めた。

全生徒を範囲とする組織については、まずは1880年代後半に生徒のみによって構成される相談会・矯風会という合議機関が成立した。しかしながら、これらの組織は教職員を含んでおらず、学校全体を包括する組

表1 長野県尋常中学校『校友』発刊状況

第一号	1895年11月
第二号	1896年1月
第三号	1896年3月
第四号	1896年5月
第五号	1896年7月
第六号	1896年9月
第七号	1896年12月
第八号	1897年4月
第九号	1897年9月
第十号	欠
第十一号	1898年3月
『校友』各号（長野県松本深志高等学校所蔵）より作成	

織ではなかった。これらの組織は校友会の設置以降も継続して存在し続けたため、たとえば東京府立一中のような校友会組織とは異なる状況を学校内において作り出していたといえる¹⁴⁾。また、後述するように長野県尋常中学校内では寄宿舎をはじめとして種々の団体が存在し、活動していた。本研究では、学校内の諸団体にもかかわらず設置された全校を対象とした組織がもたらした影響を明らかにしたい。

対象とする時期は、校内雑誌『校友』の発刊が開始された1895年を中心として、1904年までである。この時期は、1891年の中学校令中改正によって府県立の尋常中学校の設置が拡大し、地方において中学校への進学希望者の受け皿が拡大した時期であった¹⁵⁾。同時に、多数の校内雑誌が活版印刷によって発行されはじめる時期でもある¹⁶⁾。この時期に多数発行されはじめた校内雑誌は、学校や生徒にとって名誉なことであった以上の意味をもっていたのだろうか¹⁷⁾。本稿では、雑誌『校友』の記述をもとに検討したい。

以下、第一節では、「校友」概念を検討するための史料である雑誌『校友』の目的と特徴を明らかにする。雑誌発行の経緯を検討することで、生徒・卒業生の交流が目指されていたこと、実際には松本を中心として雑誌発行が行われていたことを示す。第二節では、校内にあった諸団体やその活動が報告されている様子を検討する。校内の諸団体や活動の言説を分析することで、「校友」概念の形式的な側面を明らかにする。第三節では、生徒による尋常中学校生徒についての言説を検討し、「校友」概念の内容を明らかにする。以上の構成で、旧制中学校卒業によってネットワークを形成する際に重要と考えられる「校友」概念がどのよう

な内容として形成されたのかを明らかにする。

1. 雑誌発行の経緯

本節では、雑誌『校友』の目的を明らかにするため、発行にいたる経緯を検討する。

雑誌『校友』発刊の経緯は、第一号巻頭の「発刊の辞」に掲載されている。

長野県尋常中学創立以来已に十余年。県下の俊髦来り学ぶもの幾んと千人ならんとす。而して今既に四散して其動静を審にする能はざるものあり。曩者中学同窓会を開き毎年一回相会して以て旧誼を暖む。然るに人々業務あり且山河隔絶期に及び咸く来集する能はず空しく屋梁を望むの歎あり。因て更に相謀り雑誌を発刊し以て会友に頒つ。之れを内にしては学科の成績及び諸般の状況より。之れを外にしては校友の動静及び往復の信書等を蒐輯報告し。以て永く同窓の交誼を貫徹せんとす。幸いに故旧忘れざるに庶幾からんか。

本校に縁故ある幾多俊髦が気脈を交通するの機関たらしむべき雑誌発刊の議は。本年六月始めて相談会に提出せられ満場一致を以て可決し。その準備員として（委員名略―引用者）八氏を撰み其事に当たらしむ。熟議の末之を同窓会に提出する事となれり。因りて本年七月の同窓会席上に於て提議する所あらんとせしが。事之に至るを得ずして閉会となれり。然れとも折角の計画今にして廃すべきに非ず。遂に名を校友と命じ之を発刊し以て校友に頒つことゝなせり。¹⁸⁾

同窓生のつながりが希薄化しているという問題意識によって雑誌を発行が企画されたとされているが、発刊に至る直接の動きは1895年6月に相談会に提出されたところから始まっている。相談会で提議されたということは、基本的には生徒によって雑誌発行が始動したと考えられる¹⁹⁾。その一ヶ月後の7月、雑誌発行の案を同窓会に提出したが同窓会では発行が認められなかった。しかしながら、雑誌発行の案は立ち消えになることなく進められ、11月の発行に至る。

同窓会は中学校職員の首唱によって1891年7月に創立された、すべての卒業生と在校生を含めた組織である²⁰⁾。雑誌『校友』は、同窓会の雑誌という性格を色濃く持ちながら企画されたものであるといえる。

雑誌『校友』の発刊は、編輯課という専属の組織

の設置による。『校友』の発刊にかかわる「発刊規定」は重要なものであるため、以下に引用する。

校友発刊規定

- 一 本誌は本校に縁故あるものゝ相互に気脈を通じ智識を交換し交誼を厚うする目的を以て印刷し之を校友に頒つものとす
 - 二 右の目的を達せんが為め 先進諸氏及び本県出身の諸先輩の賛助を仰ぐものとす
 - 三 本誌発刊に関して左の役員を置く
主任 一名 委員 八名
此他に地方委員を便宜の地に置く
 - 四 主任は本誌の編纂及び本誌一切の事務を統轄するものにして之を本校々長に依托す
委員は編輯会計を分担するものにして在校々友中より撰出す任期は満一ヶ年とす
 - 五 本誌牀裁は之を四欄に分つ
論 説 諸種の論説及び学説
文 苑 詩歌文章其他文芸
雑 録 学芸に関する事項
雑 報 校友の動静其他有要の報道
以上皆校友の寄稿に依りて編輯す
 - 六 本誌発刊は隔月一回とす
会 計
 - 七 本誌印刷費として毎月金三銭を校友より徴集す
 - 八 他に臨時寄附金あるときは之を受領し本誌印刷費の基本とす
 - 九 印刷費は毎月廿五日限り本誌会計委員へ納むるものとす但し半年分又は一年分前納するは便宜たるべし
- (以下委員名のため略——引用者) ²¹⁾

上記の「発刊規定」第四条にあるように、委員は一年ごとに交代しており、生徒がその任に就いていた。記事の執筆は主に論説・文苑・雑録・雑報の各欄を担当する生徒によってなされていたが、教職員・生徒・卒業生からの投稿も掲載されていた。雑誌発刊の目的は「本誌は本校に縁故あるものゝ相互に気脈を通じ智識を交換し交誼を厚うする目的を以て印刷し之を校友に頒つものとす」²²⁾と明示された。「発行兼印刷人」、「編輯人」は生徒名であり、雑誌編集は生徒を中心として行われていたと考えられる。同時に、編纂と事務の責任者は、学校長であった。

雑誌の目的は同窓生の「交誼を厚うする」ことであるが、むしろ積極的だったのは生徒であるといえる。

学校長がどの程度編集作業に関与していたのかを示す史料はない。また、同窓会、相談会での雑誌発行という事業に、なぜ学校が関わることになったのかも不明である。

ただし、学校長が編集役員に入っていると、雑誌のための原稿は学校長あるいは教員の目に触れることになる。当時、学校管理には校風が重要であり、生徒輿論を利用することを勧める演説が全国教育者大集会で行われており²³⁾、松本にもその情報が入ってきていた。そこでは、学校管理上、生徒の気質や意向を「窮屈ならざる時」に「教育者」が調べて活用することがよいと述べられている。長野県尋常中学校は松本の本校の他に、長野、上田、飯田の各地に支校が散在していた。雑誌編集によって集められた原稿によって、各地の生徒の意向が把握しやすくなるという利点があった可能性がある。

いずれにせよ、雑誌発行に至る経緯を検討すると、長野県尋常中学校関係者を対象としていながら松本本校での議論で種々のことが決定していることがわかる。雑誌『校友』は、松本本校を中心として全校を一括する観点から長野県尋常中学校関係者を把握していることが看取される。

2. 長野県尋常中学校における諸団体

本節では、雑誌『校友』の発刊前後において長野県尋常中学校にあった諸団体とその活動の報告から、「校友」概念の形式について明らかにする。前節では、在校生・卒業生を含んだ校友を対象として、様々なことを報告することで校友間の交流を図る場であることが目的とされていたことを示した。ただし、実際には松本本校を中心として長野県尋常中学校を把握する視点が前提されていたことを明らかにした。では、長野県尋常中学校に存在した諸団体やその活動は、松本本校を中心とした視点からはいかに記述されていたのであろうか。

長野県尋常中学校は、長野県下で唯一の尋常中学校であったため、県下のさまざまな地域から生徒が集まって来ていた。それらの生徒は出身地にちなんだと思われる集団を形成していた。また、学校が設置している寄宿舎では寄宿舎の団体である「茶話会」が存在して雑誌を発行するなどの活動も行い、他にも多くの団体が活動していた。これらの団体の活動をすべて追うことはできないが、雑誌『校友』の持つ意味を検討する上でも、これらの諸団体に触れておく必要がある。

まず、出身地域にちなんだと思われる団体である。第三号では「相別会」の様子が述べられているが、その記述によると、学内にあった団体が各自「相別会」を開いている。

四年級生徒は令により会主として五年級送別会兼懇親会を宇川亭に開く、解する者百有余名、茲に盛大なる酒宴は開かれんとす、(略——引用者) 酒宴を開き旧を談じ新を話し日没して已む、上伊那同志会は有賀亭に、実業会は校内に、茶話会は舎内に、更水会、諏訪会も亦相別の会を開き以て堪へざるの情を慰む²⁴⁾

上伊那同志会、諏訪会などは同郷者の集まりであったと考えられる。他にも更級郷友会なども存在していた²⁵⁾。

長野県尋常中学校では、寄宿舎が二種類存在した。まず、学校が設置した寄宿舎である。これは、「茶話会」という名前の「舎内生徒の機関」を作って『行餘以文』という雑誌を発行していたようである。「茶話会」は「舎内有志に依て組織せられ通常会員(生徒)特別会員(職員)の二あり、通常会員の中にも内外員の二あり、毎月一回開会し会員相互の交りを睦ふし又交互の智識を交換」²⁶⁾していた。ついで、「自治団体」と呼ばれる寄宿舎である。「自治団体」は、尚志社、良有会、披雲会、真正舎などの組織であるが、この時期の活動内容などは現在のところ不明である²⁷⁾。

長野県尋常中学校内では、報国会、普通学会、実業会、修文会、学術研究会²⁸⁾などの団体も存在していた。これらの諸団体は当時存在していた団体のすべてを網羅しているとはいえないが、部分的に検討しておきたい。

報国会は、日清戦争に触発された旧松本藩士が「尚武」のために武術を練習し、若者に教授する会を開催していた。それが「報国会」であり、会場は尋常中学校跡操場であったとする記事が初出である²⁹⁾。第一号の報国会の記事では、活動場所こそ長野県尋常中学校の施設であったが、旧松本藩士が報国会を主導していた。小林校長の後ろ盾があったとはいえ、学内の組織とは言えなかった³⁰⁾。にもかかわらず、第五号に掲載された記事では、「我校内また報国会の設あり幾多の教師聘任に依じて来り幾十の青年皆就きて習ふ」³¹⁾として、長野県尋常中学校内に、外部から武道の教師を招聘していることになっている。「我校内また報国会の設あり」としていることから、第一号の報国会と大きく変

わったとは認識されていない。ところが、第一号では学校外の報国会に生徒が参加すると記述されていたものが、第五号では、学校内に報国会があって、外部から教師を呼ぶという形に逆転している。この記事における報国会のとらえ方の違いは、雑誌『校友』でなされている活動報告の性質を表している。すなわち、第五号の時点で、一部でも「校友」が関わっている活動は、「校友」による活動として扱いうるということである。活動の参加者が「校友」として参加しているを意識しているか否かにかかわらず、「校友」の活動であると判断されれば「校友」のものとして位置づけられる。

普通学会は実業会に「対峙して本年(1895年——引用者)六月起れるもの」である。普通学会は会則第一条に「本会ハ普通学会ト称シ長野県尋常中学校普通科生徒ヲ以テ組織ス」、第二条に「本会ノ目的ハ普通学ヲ研究スルニ在リ」、第三条に会員を通常会員と賛成員と規定していた³²⁾。対する実業会は「商業農業両科生の気脈を通じ、他日実務に当るの素を成さんとの目的を持って成れる」ものであり、「実務家の来談」や植林を行っていた³³⁾。修文会は「詩歌文章を講修して、時文の流弊を矯め、真文の振興を図らん為め」に助教諭を主として4年級の生徒を有志によって作られた。活動内容は「毎月集会講談属文を為し、又毎月徴文を行ひ、之れを添削批評して、謄写以て会員中に回覧せしめ」ていたが、『校友』の発刊によって『校友』文苑欄となった³⁴⁾。

掲載されている活動には、上記の諸団体による活動の報告に加えて、兎狩³⁵⁾や雪合戦³⁶⁾といったものもある。

以上のように、長野県尋常中学校では複数の団体が多様な活動を展開していた。ここで多様な活動の存在に加えて指摘したいのは、これらの団体や活動が、松本本校を中心とする観点によって編集される雑誌『校友』に掲載されているということである。同郷者の集まりと考えられる地域ごとの諸会は、出身地域によって形成されるものである。しかしながら、『校友』という名前を冠した雑誌に掲載されるということは、長野県尋常中学校校友の中で、他地域出身者と区別される集団であることをかえって浮き彫りにする。上伊那や諏訪などの各地域が並列して扱われることによって、「校友」という出身地域に還元されない枠組みの存在を浮かび上がらせることになるのである。さらに、自治団体、運動、文芸活動、兎狩りや雪合戦など学校に帰属しない諸活動が「校友」という枠組みの中で報告されているということは、活動の目的や内容、参加者に

かわらず、「校友」全体に対する一部として位置づけられることを意味する。これは、「校友」である限りすべての構成員の活動が「校友」という共通項を通して関連づけられる回路であり、広く頒布される雑誌『校友』という媒体によって成立するものである。

3. 雑誌『校友』における「校友」概念の形成

前節で見たとおり、松本本校を中心とした全校を包含する「校友」概念は、個々人の意識の有無にかかわらず適用されうるものという形式を持っていた。本節では、「校友」の動静について掲載された言説の検討を通して、「校友」概念の形成期における「校友」概念の内容を明らかにしたい。

「校友」概念の内容を検討するにあたり、まず注目したいのは、「尋常中学校生徒」についての記述である。個々の構成員は別の人物であるので個性が存在するが、「校友」は一つである。個別の構成員の違いを無化するように語られる「校友」のあり方は、具体的な生徒について語られるときに葛藤を引き起こす。そのため、「尋常中学校生徒」についての言説に注目する。

第四号には、「○各支校生徒転学 各支校設立以来、勿々既に三歳を経たり、是に於てか各其の課程を卒り、本校第四年級に合せしもの、本年四十有二名あり」と支校からの転学者が今年初めて入学したことと、懇親会が開かれたことが記されている³⁷⁾。支校の生徒と本校の生徒は同じ中学校の生徒として、本校を中心とした視点から描かれている。

では、本校の生徒と支校出身の生徒が分け隔てなく存在していたかということ、そうではないと思われる。第七号の「茶話一束」では、編集委員から転学生への苦言が掲載されている。

在本校の支校諸君にもの申す、余輩諸君と共に書を読むと既に半歳に過ぐ、而して諸君の気焰の上りしを見ざるは何ぞや、余輩は諸賢が或る遠慮を持するに非ざるなきかを疑はんとす、諸賢が錦心の什、繡腸の作、之を吾「校友」に寄せよ、深く筐底に藏めて徒に蠹魚の食たらしむる勿れ、諸賢が明晰の議論、精鋭の舌鋒、之を普通学会に将た実業会に振へ、徒に韜晦自ら得たりとする勿かれ、諸君と袖を連ぬる僅二年の間のみ、相離るゝに及びては復胸襟を開くに詮なけん、願はくば同窓の義其の情死灰枯木の如からしむる勿れ³⁸⁾

この文章では、支校からの転学生が本校生となつてから半年が経過したときに、転学生が本校生と比べて元気がないと主張している。この文章が掲載されているのは雑報欄であり、雑報欄の編集担当の本校の生徒がこの記事を執筆したとみられる。この執筆者は支校出身の生徒が「気焰の上りしを見ざる」のを「遠慮」しているためだと判断し、『校友』に作品を発表することで「胸襟を開く」ことを説いている。文頭の「在本校の支校諸君」という言葉からも、本校の生徒と支校の生徒を同一視していないことが明らかである。実際に、3年間は本校と支校という別な場所にある学校に通っていたので、差異を意識するのは理解できる。むしろここで興味深いのは、本校の生徒と支校の生徒が同一であることの方が不自然であるにもかかわらず、「遠慮」をなくすこと、「同窓の義」を説いていることである。雑誌『校友』は「校友」の交流のためのものであり、本校の「校友」と支校の「校友」の間に違いが設けられるものではないからである。

他にも、本校と支校の関係を示している文章がある。第二号の「本誌発刊補助」と題された文章であるが、『校友』発刊に関して資金等を補助した人たちへの謝意を述べたものである。

又在飯田生徒賛者総代は、遙に書を寄せて本誌の前途を祝せられたり、此他地方校友にして本誌頒布を望まるゝもの続々たり、而して吾曹が今日までに頒布を了りたる本校出身諸君には在学諸君第一高諸君あるのみ³⁹⁾

ここに引用した「本誌発刊補助」では、本校職員一同に加えて飯田支校、長野支校の先生から資金援助がなされたこと、さらに「毎月若干金を恵投せらるゝの約あり」⁴⁰⁾との報告がなされている。それに続いて、飯田支校の生徒の「賛者」が発刊を祝す書を寄せたという記述がある。『校友』には飯田支校も含めた各支校の生徒であることが明記された論考も掲載されており、松本本校だけでなく、本校支校のすべてが発行の対象となっていたことも明らかである。また、同じ「校友」でありながら本校と支校の生徒の区別がつくようになっていたことは、松本本校を中心とする見方を如実に表している。松本本校の生徒と考えられる文章には、所属が書いていないためである。雑誌『校友』以前には、手書きの回覧雑誌としてごく限られた範囲で論考を回し読みする程度であった。雑誌『校友』によって、長野県尋常中学校という広い範囲での出来事

が、松本の編集局に原稿というかたちで集中することになったのである。

当時、長野県尋常中学校を卒業するためには、第4学年と第5学年の2年間は松本に通う必要があった。中学校を経て上級の学校へ進学するためには、松本で卒業する必要があったのである。「同窓の義」を殊更に主張する理由は、同窓生の交流という雑誌の目的から理解可能である。しかしながら、本校と支校の区別が当然に行われていることから、「同窓の義」は実は松本本校に焦点を絞ったものであるとわかる。支校の生徒間や本校支校の生徒間での同一視や交流はさほど重要視されていない。「校友」概念は、松本本校の生活を経て卒業していく生徒たちのつながりを目的とした「同窓の義」という内容を持ち、長野県尋常中学校生徒同士の交流が特別に目指されるというものではなかった。長野県尋常中学校における「校友」概念は、松本本校を卒業してあるいは上級学校へ進学する生徒にとって有効な内容を有していたとすることができるだろう。

おわりに

以上、本稿では、校内雑誌『校友』の言説を検討することにより、「校友」概念の形成過程を明らかにした。同窓生ネットワークが機能するために、同窓生同士をつなぐ「校友」概念がいかなる特徴を持って形成されたのか、以下で本論をまとめたい。

第一節では、雑誌『校友』発刊の経緯を検討した。まず、雑誌『校友』は同窓生の交流の場となることが目的とされたことを示し、さらに発行までの議論が松本本校を中心としてなされていたことを明らかにした。このことから、雑誌『校友』は長野県尋常中学校全体を対象として発行されていたものの、前提となっていたのは松本本校を中心とする視点であったことが示された。

第二節では、諸団体と活動の一部を扱った。諸団体は各々で活動し、場合によっては共同で会を開催するなどしていたが、基本的には何かに統一されていたわけではなかった。団体も、出身地域に基づくと思われる親睦を目的とするであろう団体から、文芸や学芸に興味を持つ有志によって活動する団体、学校外の有志が主催する団体に参加しているものまで多岐にわたる。記載されている活動も、生徒が参加する団体の例会報告や相別会などの行事の報告、兎狩や雪合戦など遊びで行っていたようなものまで多種多様である。これらの活動や団体は、「校友」という名前の雑誌に掲

載されることを通して、個々人の帰属意識や出身地域にかかわらず、長野県尋常中学校校友という大きな枠組みを示していたことが明らかになった。さらに、活動報告から、個々人の活動が「校友」概念を通して直接関係のない別な個々人へと関連づけられる回路が生じていたことも明らかとなった。

第三節では、本校生徒から支校出身の生徒への檄文を検討し、長野県尋常中学校における「校友」概念の内容を明らかにした。その結果、松本本校においては本校の生徒と支校出身の生徒との違いを無化しようとする言説の存在が示された。その一方で、支校に在籍している生徒と本校に在籍している生徒は区別されており、「同窓の義」による「校友」概念は松本本校に焦点が絞られていたことを明らかにした。

以上、本稿で明らかにしてきた「校友」概念は、言葉としては全校生徒・卒業生を対象として作られたものであった。しかしながら、実際には松本本校を経て卒業していく生徒にとって有用な内容を持つものであった。同窓会が発端となって発刊に至ったという第一号の説明から考えても、人的ネットワークを利用することで近代エリートとして生きていこうとする卒業生にとっては、「校友」としてつながることは、非常に魅力的で不可欠のものであったことは想像に難くない。その反面で、支校の生徒にとっては進学しない限り相対的に重要性が低いものであったとも考えられる。

このような内容をもつ「校友」概念は、雑誌『校友』発行によって頒布されるものである。雑誌の原稿が松本本校に集約され編集発行されるという出版過程は、長野県尋常中学校を卒業する生徒の移動とパラレルなものである。松本本校を頂点とする長野県尋常中学校の制度において、松本本校を頂点とする雑誌編集体制と親和的であった。雑誌に描かれる「校友」の動静は、長野県尋常中学校を卒業して学校階梯を上昇していく生徒や、すでに卒業して近代エリートとなりつつある卒業生にとっての利点を反映したものであるともいえる。このことは、各地域の支校の生徒にとっては相対的に重要度が低くなることも意味する。支校出身の生徒が雑誌『校友』に積極的に寄稿しないという檄文は、本校の生徒と支校の生徒における雑誌『校友』の重要性を示唆している。

本稿では、雑誌『校友』での言説をから読み取れる「校友」概念を明らかにしてきた。そのため、「校友」概念による長野県尋常中学校卒業生のネットワークがいかに機能したのかという点については検討の余地がある。特に、本校に進学しなかった支校出身生徒と卒

業生との卒業後の関係などは、今後明らかにしていく必要がある。

1899年以降、各支校は相次いで独立し、各地に旧制中学校が誕生する。そこでは新たに校友会雑誌を発行し始めるのであるが、「校友」概念の形成に対して雑誌媒体の持つ影響力を意識してのことだったのかもしれない。独立後では、「校友」のメンバーシップがより排他的な様相をとる学校も存在した。今後、時期と対象校を拡大しての検討が必要となる。また、言説を分析するという方法上、どのように読まれたのかという点は検討していない。これらの問題は、今後解決すべき課題として残されている。

注

- 1) 清水唯一朗「近代日本官僚制における郷党の形成と展開—長野県出身官僚を事例に—」2008. 長野県近代史研究会編『長野県近代民衆史の諸問題』所収、龍鳳書房。
- 2) 斉藤利彦・市山雅美 2008. 「旧制中学校における校友会雑誌の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻。
- 3) 斉藤利彦 2011. 『旧制中等諸学校の『校友会誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化』2009—2012年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書 (第一集)。
- 4) 神辺靖光『日本における中学校形成史の研究』多賀出版、1993、同『明治前期中学校形成史』梓出版社、2006、米田俊彦『近代日本中学校制度の確立 法制・教育機能・支持基盤の形成』東京大学出版会、1992など。
- 5) 斉藤・市山、前掲論文 (2008)、435頁。
- 6) 三野和恵 2013. 「台南神学校『校友会雑誌』(1928年—)にみる「台湾人」意識」『日本の教育史学』第56集、71頁—83頁。
- 7) 斉藤・市山、前掲論文 (2008)、437頁。
- 8) 市山雅美 2003. 「旧制中学校の校友会における生徒自治の側面—校友会規則の分析を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第43集、8頁。
- 9) 宮坂哲文『新訂 特別教育活動—その歴史と理論』明治図書出版、1959、128頁。
- 10) 『官報』第二千九百四十九号 (内閣官報局、1893年5月2日) 該当の文章は以下の通り。
公立学校生徒ニシテ其学校職員ニ辞職ヲ勧告シ又ハ上司ニ対シ其学校職員ノ免職転職ヲ要請スルモノハ学校ノ紀律ニ背クモノトシ当該学校ニ於テ用ヰル所ノ懲罰ノ例規ニ照シ嚴重ノ処分ヲ為スヘシ
- 11) 富岡勝 2005. 「尋常中学校の校友会成立に関する検討課題と方法」『近畿大学教育論叢』第16巻、第2号、45頁。
- 12) 清水、前掲論文 (2008)、129頁。
- 13) 斉藤・市山、前掲論文 (2008)、443頁。
- 14) 東京府立一中の校友会については、宮坂前掲書 (1959)、渡辺誠三 1997. 「中学校における部活動の発祥と位置づけ」『特別活動』第6号、富岡勝 2008. 「東京府尋常中学校における校友会の成立」『中等教育史研究』第15号などを参照。
- 15) 米田俊彦『近代日本中学校制度の確立—法制・教育機能・支持基盤の形成—』東京大学出版会、1992、他。
- 16) 斉藤・市山、前掲論文 (2008)、439頁—443頁。
- 17) 同論文、444頁。
- 18) 「発刊の辞」(『校友』 第一号、1895年11月、長野県尋常中学校校友編輯課) 1頁—2頁。
- 19) 「尋常中学校卒業生一覧」(『長野県松本中学校 長野県松本深志高等学校 九十年史』、松本深志高等学校同窓会、1969年、120頁—131頁) で確認できたところでは、準備員は生徒である。なお、以下では同年史を『九十年史』と表記する。
- 20) 『九十年史』135頁—136頁。
- 21) 「校友発刊規定」(『校友』 各号、奥付)。
- 22) 同上。
- 23) 山田光二「学校管理の事に就て」(『松本親睦会雑誌』 第四十八号、1890年7月) 9頁。「生徒の気質多数生徒の意向等を知るには、其学校教授時間に於てせずして、遠足なり運動会なり学校の帰路なりに於てする等。總て窮屈ならざる時に於てする方が、余程宜しいと私は信じます」とある。
- 24) 「相別会」(『校友』 第三号、1896年3月、長野県尋常中学校校友編輯課) 51頁。
- 25) 「歳暮と各会」(『校友』 第二号、1896年1月、長野県尋常中学校校友編輯課) 51頁。
- 26) 「校内雑記 寄宿舎」(前掲『校友』 第三号) 55頁—56頁。
- 27) 『九十年史』256頁—285頁他。松本市教育百年史刊行委員会『松本市教育百年史』1978年、250頁—255頁。これらの「自治団体」は校内で強い影響力を持っていたと思われるが、現在検討できていない。
- 28) 『九十年史』138頁には活動が記されているが、元の史料にあたっていないため本稿では言及しない。
- 29) 「報国会」(前掲『校友』 第一号) 96頁—97頁。
- 30) 『九十年史』138頁。
- 31) 「報国会」(『校友』 第五号、1896年7月、長野県尋常中学校校友編輯課) 45頁—46頁。
- 32) 「普通学会」(前掲『校友』 第一号) 95頁。
- 33) 「実業界」(前掲『校友』 第一号) 94頁。「実業会の殖林」(前掲『校友』 第二号) 55頁—57頁。
- 34) 「修文会」(前掲『校友』 第一号) 96頁。
- 35) 「蒐狩記事」(前掲『校友』 第三号) 46頁—48頁。
- 36) 「雪戦」(前掲『校友』 第三号) 48頁—50頁。
- 37) 「各支校生徒転学」(『校友』 第四号、1896年5月、長野県尋常中学校校友編輯課) 35頁—36頁。
- 38) 「茶話一束 在本校の支校諸君にもの申す」(『校友』 第七号、1896年12月、長野県尋常中学校校友編輯課) 61頁—62頁。
- 39) 「本誌発刊補助」(前掲『校友』 第二号) 54頁。
- 40) 「本誌発刊補助」(前掲『校友』 第二号) 54頁。

(附記) 史料の閲覧には、長野県松本深志高等学校、同校同窓会に格別のご配慮をいただいた。ここに記して謝辞とする。

(指導教員 小国喜弘教授)